

15歳 郵便局に就職
26歳 幼なじみをたよって上京し、結婚
38歳 処女作が雑誌に掲載
53歳 『二十四の瞳』を発表

vol. 17

壺井 栄

▶▶ Tsuboi Sakae

貧しい生活の中、 夫を支えながら花開いた作家

小豆島と聞けば『二十四の瞳』を真っ先に思い浮かべる人は、少なくないだろう。戦争へと向かっていく時代を背景に、一人の女性教師とその生徒たちの苦しみと悲しみ、彼らの交流を描いたこの作品からは平和への願いが伝わってくる。作者は壺井栄。作品の舞台となった小豆島出身の作家である。

▶▶▶ 家の破産で勤労の日々に

栄は1899年（明治32年）、樽職人の家に生まれた。醤油造りが盛んだった小豆島には多くの醤油蔵があり、栄の父は醤油の仕込みに欠かせない樽を作る職人として腕を振るっていた。父母は自身の子ども10人に加え、2人の孤児も引き取って育てていた。幼い頃の栄は、祖母の膝の上で聞く昔話が大好きだった。住み込みの職人たちも含めにぎやかだった家は、取引先の蔵元の倒産により一気に傾き、破産する。栄が11歳の時だった。

家計を助けるべく、栄は尋常小学校に通いながら子守りで日銭を稼ぎ、14歳で高等小学校を卒業してから1年後、郵便局に就職した。月収を得られることを喜んだものの、小さな郵便局での仕事は多岐にわたり、無理がたたったのか肋膜炎と脊椎カリエスを患い、18歳で退職した。

兄と姉を病により相次いで亡くした翌年、村役場に就職した。事務員として働く一方、プライベートでは文豪たちの作品を片っ端から読みあさったり、同人誌の発行を手伝ったり、文学の世界にのめり込んでいった。

▶▶▶ 時間の余裕ができ、創作活動を本格化

同郷の幼なじみをたよって上京したのは、26歳の時。ほどなくして結婚したとは言え、栄の苦労は続く。自ら



1899年、香川県出身の作家。映画化された『二十四の瞳』の他、NHKテレビ小説として1年間放送された『あしたの風』など多くの作品を残している。

の思想と文学を追求していた夫の収入は心もとなく、家賃が払えず転居することもあった。それでも栄は議論のため集まった夫の仲間たちを、お茶でもてなした。

作家の作品を書き写す「筆耕」をしたり、時計部品卸の会社で働いたりしながら、栄は家計を支えた。自身に子はなかったが、姪にあたる亡くなった妹の子を育て、母亡き後は妹2人も自宅に迎え入れた。自分が食べていくだけでも精一杯だったはずなのに、である。

夫は思想的な理由から幾度となく拘留され、時には投獄されることもあった。そんな夫を、栄は差し入れするなどして支えた。その頃、雑誌が募集していた生活記録に投稿し入賞しているが、書くこと自体はそれ以前から始めていた。夫の文士仲間を通じて知り合った女流作家たちに勧められたことが、きっかけだった。本格的に創作活動をスタートさせたのは、夫が自らの思想にもとづく運動をやめて以降。栄は自分の時間がもてるようになったことで、執筆に打ち込むようになった。39歳の時に発表した作品は雑誌に掲載され、処女作となる。その後、夫が会社勤めするようになると生活が安定し、創作のためより多くの時間を割けるようになった。

53歳の時、雑誌に連載していた『二十四の瞳』は稀代の名監督の目にとまって映画化され、一大ブームを巻き起こした。国民的な作家となった栄のもとには執筆依頼が引きも切らず、部屋にこもって執筆活動に没頭した。そんな栄に代わり家のことを担ったのは、我が子同然に育ててきた姪や夫だった。60歳を過ぎてからは入退院を繰り返すようになる。それでも心の支えだからと筆を握り続け、喘息の発作により67年の生涯を閉じた。家族を愛し、故郷を愛した人生だった。

（執筆／ライター 篠田 りょうこ）